

研究計画概要書

研究課題名	セラピー犬との遊びが自閉症スペクトラム障害がある子どもの対人コミュニケーションに与える影響ーセラピー犬との象徴的コミュニケーションー	
研究組織	研究責任者	名古屋大学大学院医学系研究科リハビリテーション療法学専攻教授 辛島千恵子
	研究分担者	名古屋大学大学院医学系研究科リハビリテーション療法学専攻博士課程（前期課程）1年 野中美沙
	共同研究者	1)大阪四條畷学園大学リハビリテーション学部教員 野口裕美 2)日本動物病院協会（JAHA） 太田恵理
	研究事務局	名古屋大学大学院医学系研究科リハビリテーション療法学専攻 〒461-8673 名古屋市中区大幸南 1-1-20 メールアドレス：karashim@met.nagoya-u.ac.jp
研究の意義・目的	<p>【目的】 本研究は、言葉でのコミュニケーションを十分に行っていない ASD 児を対象とし、セラピー犬との交流が対人コミュニケーションに与える影響について検討することを目的とする。</p> <p>【意義】 言葉を介したコミュニケーションを苦手とする ASD 児と言葉を介さずに交流できる犬との関わりが対人コミュニケーションに与える影響を検討することで、<u>普通の日常生活に存在する作業のひとつである犬との遊びが ASD 児の対人コミュニケーションの発達に効用をもたらす重要な作業であることを提示することができる。</u>同時に、ASD 児の言葉が育つ前段階の「見る」「触る」「撫でる」「抱きつく」「声をかける」などの象徴的コミュニケーションを育てるための手段ともなり特別な場所での動物介在療法等へ参加することなく、<u>日常生活の中で対人コミュニケーションの基盤を緩やかに促す可能性がある。</u></p>	
主な選択基準	ASD（DSM-5）と診断がついている児、またはその疑いがある 3 歳～6 歳児の中で、現段階で、言葉による意思伝達を行っていない児とする。また、① <u>養育者の判断から犬が好きであり、これまで一度以上は犬と遊んだ経験をもつこと</u> 、② <u>子ども同士の 2 者関係の発達がみられることを基準とする。</u>	
研究方法	<p>1. 研究デザイン 群内介入前後比較デザイン（仮説生成デザイン）</p> <p>2. 手順</p> <p>1)研究協力を依頼する 4 施設（中津川発達支援センター、美濃加茂市児童発達支援センター、日進市子ども発達支援センター、小牧市あさひ学園）で掲示によるリクルートを行う。</p> <p>2)参加希望者へのインフォームド・コンセントを行う。</p> <p>3)研究の同意を得た対象児について、研究分担者が JSI-R mini を実施する。（感覚処理機能の評価）</p> <p>4)実験の実施と測定（象徴的コミュニケーション行動の評価）</p> <p>①対象児に絵を用いて説明をする</p> <p>②対象児同士の自己紹介、セラピー犬の紹介</p>	

	<p>③ベースラインセッション A1：子ども同士の遊び場面の観察 ④介入セッション B：セラピー犬を介在させた遊び場面の観察 ⑤ベースラインセッション A2：子ども同士の遊び場面の観察 5)③～⑤について、象徴的コミュニケーション行動の分類表を用いて評価者 2 名で分析する。</p> <p>3. 実験方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・場所：名古屋大学大学院医学系研究科大幸キャンパスの一室 ・時間：遊び場면을共有する時間は 20 分と設定する。 <p>[ベースラインセッション (A1,A2)]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・使用するおもちゃ：対象児の養育者に児が日常的に好んで遊んでおり、他児と共有して遊べる要素のあるおもちゃについて事前に聴取し、類似したおもちゃを用意して用いる。 ・2者関係の取り方：それぞれの対象児が日常的に好んで遊んでいるおもちゃを 2 者間で介在させる作業として用いる。研究実施者と養育者は、基本的には見守りの態度をとる。 <p>[介入セッション (B)]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2者関係の取り方：セラピー犬との交流をひとつの遊び（作業）として捉え、対象児の間で介在させる作業として用いる。 <p>[セラピー犬について]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・協力を得るセラピー犬は日本動物病院協会に所属する共同研究者（以下、パートナー）が飼っているゴールデンレトリバーとする。 <p>4. 測定方法</p> <p>1)遊び場面の録画 2 台のビデオカメラを設置して対象児とセラピー犬の録画を行う。</p> <p>2)効果測定 ビデオによる観察データを、「コミュニケーション分析・記録表」を用いて「児の行為」と「セラピー犬の行為」にわけた記述データにする。続いて、記述データを操作定義に基づいて、各上位・下位カテゴリに分類し、行動の出現回数をカウントとする。</p> <p>5. データの解析方法</p> <p>1)評価者間の信頼性 評価者 2 名によるビデオ記録分析の信頼性は、Cohen の Kappa 係数により一致率を算出し、信頼性の測度とする。</p> <p>2)統計処理</p> <ul style="list-style-type: none"> ・象徴的コミュニケーション行動の出現回数：対応のある t 検定を用い、危険率 2.5%未満を有意として分析する。 ・象徴的コミュニケーション行動の出現回数の変化とその関連性：ピアソンの相関係数を用い、危険率 5%未満を有意として分析する。
研究期間	実施承認日から平成 31 年 3 月 31 日
インフォームド・コンセントの方法（説明を行う者等）	研究分担者が 4 施設（前述）の施設長へ研究の主旨を文書で説明し、承諾を得る（依頼書と承諾書）。その後、研究分担者が対象児の養育者に文書を用いて研究の主旨を説明し、同意を得る（説明と同意）。
個人情報の管理体制（個人情報管理者、連結表の管理体制等）	記述データは連結可能匿名化し、連結対応表は辛島研究室の鍵のかかるロッカーに保管する。
研究で収集した試料・同意書の保管場所、研究終了後の試料の取扱い	録画データは、名古屋大学大学院医学系研究科 本館 5 階 542-1 号室の動画解析専用のパスワード保護のハードディスク内に保管する。録画データは、解析終了後すべて破棄する。
被験者に重篤な有害事象が生じた場合の対処方法	研究で実施する評価自体は、侵襲性は低い。日常の遊び場面と同様の危険性は生じることがあるが、侵襲性はない。